

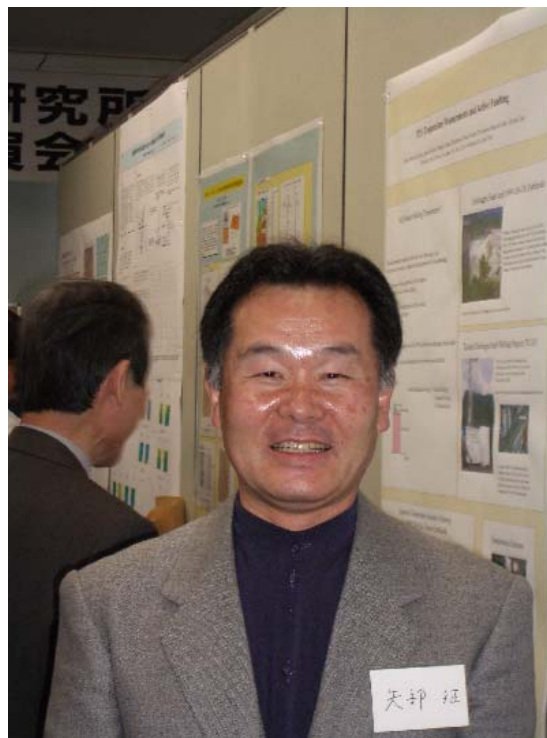
観測所勤務 41 年

機器開発班（地震予知研究センター鳥取観測所）

矢 部 征

就職した頃

昭和 38 年(1963)10 月 11 日、鳥取市円護寺公園墓地内の小高い丘の上、京都大学防災研究所微小地震観測所鳥取支所で採用試験が行われた。当時私は、鳥取西高定時制夜間部の 4 年生でありました。高校最後の年でしたから、皆それぞれ就職活動もあり、将来の道を決める時期にありました。採用試験から 1 週間くらいで高校を通して、とりあえず明日からでも点検、記録の取り換えに来てほしいとの連絡がありました。はじめの何日かは、この支所を設置するにあたり種々の御協力を頂いていた鳥取大学の宮腰潤一郎先生が付き添って通って下さいましたが、その後は私 1 人で通う事になりました。さあ、それからが大変でした。私は昼間、市内の書店で丁稚小僧、夜は夜間高校生でしたから、授業の終了と同時に学校を後にし、観測所（写真 1）の鍵を宮腰先生宅から預かり、一路あの恐ろしい円護寺隧道を通り抜け、公園墓地の中を通り、山道を観測所へ通った事が今でも鮮明に記憶に残っています。



筆者近影

観測所での仕事は、毎日の点検が重要な作業でした。地磁気の観測が行われていて、記録紙上に毎日の時間打ちとキャリブレーションを入れる作業、時々インクの補充と 1 ヶ月毎に記録紙交換を受け持ちました。温度と気圧の観測も行われ、1 週間毎に記録紙の交換もありました。採用試験の時、鳥取支所の初代所長であった一戸時雄先生に「頭は良くないですが、休まずにがんばります」と答えた言葉を思い出し、必死で観測所通いをしてたように思います。毎日の点検作業を終えて、鍵をまた宮腰先生宅の牛乳箱に戻して一日が終る日課が約 5 ヶ月続きました。採用試験の時、一戸先生が、「今日の記録は今日だけしかない」と言われた言葉が、観測所勤務という仕事の基本を言い表わしていた事に 40 年経った今ようやく気が付いたように思えます。なんでこんな山奥の人家もない、なんで墓地の中での仕事があるのか。墓地の中だからボチボチ歩けばいいのだが、そんな余裕なんぞどうも無い。あの 5 ヶ月間は、何もわからずただ必死に観測所通いをしていたのだと改めて思える今日この頃です。現在は墓地の中を歩いて観測所まで行く楽しみさえ覚えてきたようにも思えます。



写真 1 旧観測所

昭和 39 年(1964)4 月 1 日の朝から観測所勤務が始まりました。6 月 30 日までの 3 ヶ月間の見習い期間です。当時の観測所には現総長の尾池和夫先生が初代助手として赴任されており、私は昭和 38 年(1963)からの 1 年半ばかり仕事をご一緒させていただきました。当時は観測に出向く時は定期バス、列車、徒歩などの方法でしたから、計測機器等は契約の運送屋に積み込み、運搬をしていました。忘れもしませんが、当時、観測点設置のための調査の時などは、列車の線路上を歩いて場所を探していたこともありました。時代的にのどかな時期だったと思います。

鳥取微小地震観測所

京都大学防災研究所微小地震観測所鳥取支所の看板から、京都大学防災研究所附属鳥取微小地震観測所に変わり、この年の 6 月 20 日に開所式がありました。開所式直前の 6 月 16 日に新潟地震があり、船岡観測点で観測を開始した時でした。開所式に地震の記録を展示したいとの声があり、早速にあの赤インクで記録されたドラム式レコーダの紙記録を 1 日かかりで回収して、開所式の場に展示した思い出もあります。

4 月からの 3 ヶ月の見習い期間も終り、私は 7 月 1 日付で事務員に採用のはこびとなりました。8 月になり、私は京都に挨拶を兼ねて 1 泊 2 日の出張に出ました。(この時、一戸先生は「留守番」のためにわざわざ鳥取に出張して下さいました。)小学校の修学旅行以来の京都でしたから、方向、道のりなどわからず、頂いたメモを頼りに大学構内を目指しました。あの有名な時計台の正門を通り抜けて理学部へ行き、尾池先生にお会いしたのを覚えております。理学部の校舎へ案内されている間、ただただキョロキョロの様子だったように思います。その後正門横の木造の事務室へ案内され挨拶を済ませたように思います。帰鳥して観測所に戻ると、今ではどうてい考えられない事と言いますか、のどかと言いますか、観測所の裏庭に穴を掘りたらいが埋めてありました。一戸先生曰く「ここで行水をしたんだよ」と。今から思えば自然科学者はこのように自然の中で体感されるのだなと感じたものでした。そういう私も、実は、その後先生に習い、行水をした事を覚えています。

昭和 40 年代

昭和 40 年(1965)から、所長として、岸本兆方先生が来られ、観測所の統括をされることとなりました。そして助手には見野和夫先生が赴任され、観測所の地下室で三雲健先生と共に長周期地震計の観測を長年した事が印象に残っています。あのとてつもない大きくて重たい地震計 3 成分と理化学研究所のガルバノメータを途中アンプでつなぎ、地下室の一室を暗幕で囲い、光学式の記録を取りました。長周期地震計の周期は 20 秒でガルバーの周期は 120 秒。どちらもやっかいな機械で、周期を出すのに苦勞をした事を覚えております。時には朝から地下室に潜り込んで時間を忘れて階上に上がってみると外は暗かったことも幾度かありました。光りをガルバーに当てガルバーは地震計の動きをとらえてその光の像をドラム内の印画紙に焼きつける方法の観測機器でした。観測所の建物が夏/冬の温度差によって収縮したりするらしく、時折、午前午後の記録がドリフトする事もあったり、地震計の釣り糸が切れたり、またガルバーが引っかかったりして苦勞をした思いが昨日のこのようです。橋爪道郎先生が暗い地下室でガルバノメータを 1 台足で引っ掛けられて、踏みつぶされた事もあり、それは大変でした。見野先生との 2 人勤務の時代、そして若かった時代、仕事も観測所の保守、管理、事務、観測、データ整理等いろいろありましたが、ある程度時間が有効に使える事も出来、当時は鳥取観測所時間なるものが出来つつあるようにも感じられました。でも今から思えば、これも仕事をして行く上で必要な事であったかも知れません。

昭和 41 年(1966)の夏に、和歌山県の打田町で極微小地震観測が行なわれ、始めて野外の観測に参加させていただきました。8 月のお盆前の 10 日間位でしょうか、山中にケーブルを張り、観測機器をセットし、夜中の観測でした。何もわからぬ時期の仕事でしたから、ただ黙々と身体を動かしたことしか覚えていません。観測後半は先輩の松尾成光技官と交代して和歌山を後にした最初の野外観測経験でした。

前渡資金管理

昭和 43 年(1968)の 8 月盛夏、10 月からの前渡資金管理のため、京大正門横の事務室で、白浜観測所、潮岬観測所、鳥取微小地震観測所の合同講習会がありました。1 週間みっちり指導をいただき、秋からの運用開始に向けて汗を流した時でした。ちなみに宿舎は現在はありませんが吉田神社そばの職員宿舎京園でした。そして公金を扱うと言う大きな仕事が入り、銀行、金庫、小切手、帳簿、そろばん、伝票作成、業者への支払いなど、特に毎月末は支払いに廻り帳簿整理、報告書提出と時間を前渡資金に使うことが多くなりました。資金を扱う事は、取引業者への支払いの迅速化としては大きな利点でしたし、常用の雑費購入に関しては大いに助かりました。毎年度末の 3 月 31 日に経理部からの会計金庫検査があり、金庫残金、伝票、帳簿検査があり、歴代教官の方々にはこの恒例行事に同席していただきました。平成 2 年の地震予知研究センター設立までの間、前渡資金管理を続けることになりました。

プロトン磁力計

昭和 42 年(1967)には中尾節郎技官が採用されましたが、9 月より防災研究所微小地震部門に勤務で、相変わらずの 2 名勤務体制でした。この年から現在も連続観測中であるプロトン磁力計が導入されて、地磁気観測の固定点としての道を歩むことになりました。京都大学教養部の太田征次郎先生、住友則彦先生らが中心になられ、中国地方東・中部を中心にプロトン磁力計の定点観測やサーベイなどに数年に渡り観測をした事もありました。プロトン磁力計を用いた計測が昭和 42 年(1967)からスタートして、昭和 53 年(1978)迄の 11 年間は国際電子工業製、昭和 53 年(1978)から平成 9 年(1997)迄 19 年間は KK 丸文製、そして平成 9 年(1997)からは国際電子工業製と代替わりはしましたが、現在に至る迄 38 年間黙々と地磁気変化を記録してくれています。記録方法もパンチャー記録、カセット記録、フロッピー記録とさまざまな展開がありましたが、現在も現状維持で計測中があります。当初の頃はアンプが夏の暑さに弱いので 1 日中影の部屋、比較的涼しい地下室、そして直接アンプに扇風機の風を当てるなど、場所を変えたり工夫をしたものでした。機械に一定の温度調節の出来る現在の空調設備がない時代でしたので、当時の機械はよくぞ耐えたものだったと思う事もあります。

エピソード

ここで一つ何とも恥ずかしいやら、度胸があったのかも存じはしないが、昭和 44 年の夏の昼下がりのエピソードを一つ記します。暑いから窓や扉を開けっ放しで仕事、昼寝も……。そんな時に、玄関を叩く音がするではありませんか。次が問題のシーンです。上半身裸、パンツ 1 枚の姿でヒョイヒョイと玄関に出ましたところ、出てビックリ仰天きれいな女性数名と男性 1 名がおられるではありませんか。何が何だかわからぬままに、つついパンツ 1 枚の姿で調子にのりまして話の渦にのめりこみました。聞けば日本交通バスのバスガイド嬢と指導員で、鳥取市内の観光名所の研

修でお邪魔したとの事。今から思えば当円護寺には鳥取藩主の墓地や各記念塔などいくつかは名所、史跡はあるものの、わざわざあの公園墓地内を通り抜けて観測所までと思うのだが・・・何はともあれパンツ1枚の姿で数分間観測所の案内をさせていただきました。その後はあの環境の状態が雰囲気を汚したのか、女人禁制の場所となりつつありましたが、また再び解禁の場所となることになったことは、嬉しく思います。

運転免許証

昭和43年(1968)の夏に官用車が納入されましたが、運転者不在のため車は宇治へ預けられました。ちなみに官用車は京都44た15-56です。秋から観測所勤務終了後、自動車運転免許教習所へ通いはじめて、昭和44年(1969)1月13日、自動車普通免許を取得いたしました。ここから観測点に出向くために必要となる運転免許証の取得が嬉しくてたまらなかった時期でもありました。

昭和45年(1970)からは西田良平先生が赴任され、いよいよ看板通りの微小地震観測の体制を整える時期が来ました。以前は、微小地震観測業務は宇治の研究所から出発/帰所でしたから、鳥取を起点として観測業務をはじめると言う画期的な時代が到来とも感じられました。約2年半宇治勤務の中尾技官もこの年から鳥取勤務になり、3人体制で観測所の維持管理、観測業務等に向かうことになりました。兵庫県の氷上、大屋、泉、三日月、鳥取県の智頭、鹿野、倉吉と7観測点の保守管理と、山崎断層臨時観測点の観測業務に携わらせていただきました。観測点地主の人との付き合いから始まり、交渉、契約の段階まで勉強、修行をさせていただき、人と人との信頼関係のありがたさが身に沁みる思いでした。

観測方法

真空管、トランジスタ、ICと観測方法も時代と共に進んで行きましたが、元来、機械、電気などには弱く得意ではありませんでしたので、当時の教官、先輩、同僚、後輩、それぞれの方には手を取り、足をとりの苦勞のかけっぱなしであった事を今でも覚えております。でもこの苦勞を和らげ、一つの大きな励ましの力を頂いた忘れられない事があります。当時の微小地震部門からスタートした技官の集まる機会があり、平野憲雄技官、松尾技官、中尾技官らが中心となり私もその仲間に入らせて頂いたことです。自分の気の進まない時期もあり、いろいろと心配をかけたことも多くありましたが、この集まりは同じ仕事をしている者の集まりだから、気楽に楽しくの皆の励ましに安堵したものです。以後は遠隔地の上宝観測所の和田安男技官、和田博夫技官、そして防災研の細善信技官ら、さまざまな方々との交流の場として参加をさせていただいた事を忘れておりません。今振り返ってみて、あの頃のあの気持ちがあったから今こうしてこの時期があるのではないかなとも思えます。

一大事

昭和49年(1974)は田 為成先生が4代目の助手として赴任されました。大変に大げさで恐縮ではありますが、この年程、私のこれ迄の人生で一大事のあった年はありません。昭和49年9月6日午後4時40分頃と言われました。この日は観測所で昼弁当を食べて中尾技官と共に智頭観測点に観測器修理に出かけた記憶は30年経った今でも記憶にあります。以後の事は全て記憶から消えております。観測点帰りの国道53号線釜ノ口での正面衝突交通事故に合いました。双方共2名の乗員で、追越し車線をはみ出して来た普通車と正面衝突です。助けていただいた地元の皆様から後で

聞かせていただいた話によりますと、私は助手席とボンネットの間に挟まれていて出すのに時間がかかり、出した時は意識はなく、目は空洞で道路上に置かれ毛布がかけた状態であったそうです。地元の方々の献身的な見守りで2時間後に市立病院の集中治療棟に運ばれた。集中治療室そして一般病棟に移るまでの事は全然意識なしの状態でした。事故での傷病名は脳挫傷、頭蓋底骨折疑、鎖骨骨折でした。事故から20日目の朝、突然大泣きをして目がさめました。「ここはどこだい」隣のベッドの人に聞いた事を今でも鮮明に覚えております。「あんたは交通事故でここに来た」と聞き、ああそうかと思ったのが不思議でしょうがなかった。主治医が回診に来て、簡単に名前、歳、住所を聞き納得した様子で私の病室を出たのを記憶しています。数日後の回診時に主治医から言われたことは「おそらくこの事故の記憶は出ないだろう」と言うことばであった。その言葉通り30年経った現在でも記憶はありません。幸いな事に、おかげさまで後遺症もなく今日が迎えられました。事務的にも公務災害の認定をいただきましたことと共に、当時の研究所の方々には多くの励ましや激励をいただきましたことに感謝の念を忘れられません。前渡資金管理の仕事は事故の9月から2月までの半年間佃先生にお願いをし、赴任早々余計な仕事をお願いしたことを覚えております。

昭和50年代

昭和50年(1975)頃から微小地震観測のテレメータ化の動きが始まり、鳥取サブセンター、各衛星観測点のテレメータ用の建設工事も開始されました。現場説明、入札、建設工事等、急ピッチの段階でした。テレメータ装置の納入が半年前になるために、急きょ旧本館東側に増築工事をし、テレメータ装置の搬入となりました。それと時期を同じくして観測所も条件、施設設備等の整備から分館建設の動きもあり、旧本館でテレメータ観測中に円護寺浜田の地に分館建設の運びとなりました。この浜田の地は公園墓地前の田畑で以前から職員宿舍用地に用意されていたものでしたが、職員2名は持ち家があり、分館用地として動きだしたものです。

昭和52年(1977)に新しく鳥取微小地震観測所分館が活動を始め、墓地内の本館と共に2箇所観測所を維持、管理する事になりました。テレメータ装置一式など業務のほとんどが分館を起点にして動くことになりました。そして昭和54年(1979)から多里観測点、久米観測点が観測開始となり鳥取微小地震観測所は兵庫県4点、鳥取県4点、岡山県1点、そして鳥取サブセンターの計10観測点が微小地震テレメータ観測網として動き出しました。

昭和55年(1980)からは鳥取県八頭郡河原町湯谷、鳥取県東伯郡三朝町、鳥取市賀露町で地下水温、温泉連続観測を始める準備を開始しました。三朝町の場合は温泉温度が80℃前後で、手造りセンサを約200m底まで下ろし計測しました。温泉温度が高い事もあり故障、中断が度々ありました。1983年10月31日の鳥取県中部地震の際も故障をしており、温泉温度変化を見ることが出来ませんでした。ここは10年余りの観測で終了しました。賀露町の場合は20℃前後の観測井戸でセンサも20m位のところへ下ろし水温計測をしましたが殆ど変化の様子は見られませんでした。市の道路整備の関係で立ち退きを迫られ約12年で観測終了をしました。

残るはあと一箇所、河原町湯谷です。これがまた面白いと言いますか、思わぬ温泉水温変化が現れる場所として25年目になりますが、故障気味の時もありながら連続して観測中です。1985年8月の夏暑い時期でした。手造りの温度計センサを持ち佃先生と共にセットに出かけました。2箇所の自噴泉からなり1箇所は深さ40cmの所へ温度センサを置きましたが、露天であり昼間は日射の影響を受け水温が上昇するため、1箇所は深さ25mの底へセットしました。データの蓄積と共に「湯谷温泉におけるコサイスミックな水温変化」として1991年以来2001年までの10年間だけでも地

震発生後 17 回の顕著な水温変化を観測している泉源の一つであります。また 1995 年の兵庫県南部地震の際に地震 2 日後にデータ回収に出かけて行きますと、母屋の泉源の温泉水がピッタと止まっているではありませんか。現地の老人は「昭和 18 年の鳥取地震の時、わしは小さい子供であったが、家の者から「1 年ぐらいい水が出てこんで」と言われたことを思い出した」と、私に声をかけてきた。そして「今度も同じように 1 年ぐらいい水が出てこんで」と話してきた。「またそのようになりますかねえ」と私は受け答えてその場を後にした。観測はデータ回収と点検、保守で毎月出向いており、観測井の様子は行く度に見ていましたが、水は出る様子はありません。そしてとうとう老人の言っていた言葉通り翌年 1996 年の 2 月に再び水の出が始まりました。鳥取地震から 50 年経っても同じ井戸で兵庫県南部地震の影響が再び繰り返される様子をまざまざと感じられた現象でした。

一人芝居

昭和 60 年(1985)に一人芝居の交通事故もありましたので、これも少し書かせていただきます。これは覚えております。この頃は時々バイクで通勤をしていた事があり、9 月 10 日これもまた鳥取地震の記念日ですが、仕事を終え午後 7 時頃ですが、円護寺隧道を出て左へ曲がり、すぐ右カーブの時点でバイクのハンドルを取られ坂道でバイクごと転倒、ヘルメットは側溝へ上着は破れ右頬右目が腫れ相当なものでしたが、意識があったので、阿呆な奴ですバイクを引いて病院を転々としました。三箇所目の病院に緊急入院でき、運良くこれも身体に異常なく、右頬打撲、右肩打撲で 7 日間の入院で終わりました。交通事故にも会いまた一人事故も起こしましたが、運が良いのか、悪運が強いのかここまで何とか来ましたことは幸運だったと感じております。

昭和 60 年代

昭和 61 年(1986)からは澁谷拓郎先生が赴任され新築の分館にて鳥取微小地震観測所の観測態勢を整えて行くこととなりました。若くて新鮮な感覚での観測態勢を掲げられて、観測坑内に新しく STS 地震計を設置され、世界中・地球の裏側の地震まで画面上に波形を見ることができるようコンピュータを使用しての観測・研究が鳥取観測所において行われて、ひと昔の時代と違うような時期が来たような気持ちがしました。私は時代遅れの人間でパソコン、コンピュータはまだまだ先の事のようなことしか考えていませんでしたから、既にこの頃から時代は変わりつつあるようにも思った次第です。

平成元年(1989)からは小泉尚嗣先生（現在、産業技術総合研究所）が赴任されて、現在も観測継続中の湯谷観測点の水温と湧出量、電気伝導度等の新しい分野の観測を始めると共に、兵庫県、島根県などの温泉観測点の保守、管理にも携わらせていただいた。特に島根県東部地域における観測では日帰り出張が多く、朝早く出発し 2-3 観測点廻るケースが多々あり、帰れば夜遅い時もありました。この地域での温泉観測では私自身の把握する限り温泉水の採水、データの安定、故障が少ないなど比較的順調に観測が出来たのではないかなと思います。採水して来た各観測点の温泉水を液体シンチレーションカウンターにて成分解析するための用意をすることや、45 歳になって始めてパソコンというものに向かうことを学ばせていただいたのがこの時期でした。一から手とり足とりの連続と、手本を作成していただき、それを覚えるのに時間と労力を費やしたことを覚えております。嬉しかったですねえ。1 年経った時期でしたか、湯谷観測点の温泉データがパソコン上に映りました。持ち帰ったカセットテープの観測データをフロッピーディスクに書き換え、それをパソコ

ン処理して描いたものでした。小泉先生から同じ産業技術総合研究所の北川有一重点研究支援協力員に湯谷観測点の地下水温泉観測が引き継がれ、松尾技官や浅田照行技官らの製作した測定器を用いての湧出量の観測も加えられて観測を強化した。数々の観測データの蓄積を生み出し、25年経った現在でも農家の物置き小屋の一角で観測を継続中であることに、ご苦労様と観測計測器に御礼を言いたい。

地震予知研究センター発足

平成2年(1990)に地震予知研究センターが発足になり、鳥取観測所として新たにスタートをする。私も前年の平成元年11月で技官に配置換となり、地震予知研究センター設立と同時に前渡資金管理の仕事は終了することになりました。平成2年6月限りで23年間の前渡資金管理者の職を終える事になりました。その間、観測所の諸経費の一部を任せられたが、当時は遠隔地の施設には欠かすことの出来ない仕事の一つではなかったのではないのでしょうか。現在と比べて事務的に運用の面でスピードや動きがゆっくりであった時代の資金運用、相手側業者との取引面で助かったように感じられます。

平成4年(1992)から西上欽也先生が赴任されました。実に7代目の助手を迎えることになりましたが、以前に北陸観測所にも勤務されたこともあり隔地施設の状態、運営等に関してはさほど困られる様子は少ないと感じられました。しかしセンター設立後は教官の方々も忙しく隔地施設と防災研の往復もたびたびで、さぞかし大変であったろうことを今でも頭の隅に覚えております。万事を手早く処理され、観測所運営に携わられたことにあらためて感謝の気持ちを表せてもらいます。先生はキャッチボールが好きで昼休憩や時間を忘れての運動に所員一同楽しんだ一時もありまして、申し訳ないと思いつつも、だんだんとやめられない状態になってしまったことを覚えております。

観測所近辺、中ノ郷地区の環境も年々と様変わりがして来て、田畑の測量なんかも始まりだしたのもこの頃からです。鳥取2の地震計設置の土地交渉や借用、契約など力を拝借させていただいたことも忘れません。国道9号線のバイパス、市道の計画、トンネル計画、宅地造成なんかは昭和38年頃の当地の状況からは想像が付きませんが、この頃から観測所近辺も騒がしさが見えて来る状態にありました。そして観測所から北方向の小高い山を切り開いての宅地造成の工事も始まりだしたのです。以後、観測業務にも支障が出始める事もしばしばありました。

新しいプロトン磁力計

分室(旧本館)にあるプロトン磁力計も忘れてはいけない観測装置です。先に書いた丸文時代のカセットテープに収録時代は故障もありましたが、収録テープを当時資料センターの松村一男先生まで送り、再生をお願いしておりました。さぞ大変な仕事の負担をかけたのではと、今になると思われま。現在は3台目が作動しておまして、パソコンを用いての収録で、なかなか雷にも強く非常に頼もしい機種であります。データのプロッピーディスクは予知センターの大志万直人先生に送り、解析処理されております。このプロトン磁力計観測も時代の流れの影響を受ける事になり1999年、2000年、2003年、2004年とセンサ付近に携帯電話のアンテナ建設や山地の開発などにより影響を受けるので比較するため、観測所より約6km北方向の鳥取大学乾燥地研究センター農場敷地内での比較観測の実施を行なっている状況です。この10年位の観測所付近の変貌は著しく多様ですが、出来る限りの努力で観測の維持管理に取り組んできました。

MT観測

平成9年(1997)からは広帯域MT観測にも参加のチャンスをいただきました。遠くは長野県、秋田県での観測に、中川渥技官から車の運転にはくれぐれも注意との忠告をいただいたことが脳裏に残っております。その後のMT観測には兵庫県北部、鳥取県東部、大山火山、鳥取県西部、島根県東部、岡山県東部等に鳥取大学塩崎一郎先生、地震予知研究センター吉村令慧先生他、多数の学生の皆さんと一緒に楽しく仕事をさせていただきました。MT観測は秋から冬にかけての非常に天候の悪い時期に始まり、そして人員の確保も含めて一つのイベントと感じました。人力、辛抱、根気が勝負の仕事に携われたのも、私の一つの仕事の励みにもなったことの嬉しさでした。観測点探しの下見から始まり、交渉、センサ用の穴掘り、ケーブル張り、自動車運転等さまざまでしたが、「山陰地方の地震の正体を解明するぞ」という熱意のもと、楽しく充実しておりました。

新しい観測所

平成10年(1998)は、ついに22年間テレメータ観測と同時に鳥取微小地震観測所分館として活動して来た観測所移転の年になりました。国道9号線から東へ中ノ郷地区、円護寺地区を抜けて北園団地への道路開通で観測所の真上に道路が建設されるため、鳥取市との支障移転となり、新たに北園団地内桜広場に建設場所を決め工事着工の運びとなりました。

22年前と同様に分館での仕事をしつつ、新観測所(写真2)建設の工事が開始され、円護寺から離れて北園ニュータウン内で新たな観測業務を行なう方向となりました。平成10年11月から始まった建設工事も順調に進み翌年の平成11年2月に竣工となり、春たけなわの4月に祝新館建設のお祝い会のお場を設けていただき、鳥取市をはじめ、地元、関係省庁、地震予知研究センター、他多数の皆様の御臨席をいただいて盛大にスタートをした記憶がつい最近のように思えます。そして秋には鳥取にて技術研修会を行ない多数の技官の皆様と和気あいあい研修、歓談をしたものです。長い歴史の鳥取観測所はこれで3軒目の観測所ですが、それぞれの思いや、出会い、そして誰にでも愛されて研究活動出来る場として門戸を開き今日まで来ました。ここ3軒目の観測所もまた同じように活動出来るようにと切に願っています。



写真2 新観測所と看板

ハートワーク中ノ郷

地域や地元にも開かれた観測所としても活動し、平成11年(1999)からは地元の中学生の職場体験学習「ハートワーク中ノ郷」として週5日間生徒5名程度が来所し、観測所で見学、学習、仕事、実習などを体験し、仕事に対する心を培って帰る教育にも観測所は協力しています。記憶に新しいところでは偶然の一致と言いますかドンピシャリの出来事があり、これぞ観測所で一番いい経験が

出来たことの一コマを紹介しします。平成12年(2000)10月6日午後1時30分の鳥取県西部地震です。

この日は金曜日で5日目最終日。最後の日だから弁当はいらない、外でバーベキューをしてワイワイ、ガヤガヤと昼食を終わり後かたづけを始めたとたん、私と一緒に長机を運んでいた生徒が「おっちゃん！何だか足がふらついて運べん」と言い出したので、私は「何を言うのか！ちゃんと持たんと」と言い返した。しかしその後で私も足を取られてフラフラとし、その直後強い揺れとテレメータ14chの記録紙がガサガサと流れ出し、地震を体験、記録は目の前で確認と、地震観測所ならではの経験が出来たと言うような事もあり、生徒も私達もいい勉強になった事もありました。観測所で職場体験をして地震を体験するなんてなかなかないぞ。こんな事を思いながら今後こうして中学生を受け入れて地域ともに連携をし、活動力のある観測所として進むことが続くように願っています。

温泉観測

平成13年(2001)から温泉観測の観測点設置も開始され、西田先生、地震予知研究センターの渡辺邦彦先生、鳥取大学工学部の野口竜也先生と共に鳥取県、岡山県、島根県下の源泉、井戸等を調査して廻り、既に16観測点の内現在13観測点で温泉観測が実施され、データの回収が行われています。山中、立地条件の悪い場所ですが、ソーラーシステムや携帯電話システムを使い観測中です。今年度中には残り3観測点も観測開始の事となり、充実した温泉観測が行われそうです。先に湯谷観測点での地震後の温泉水の変化に触れましたが、同様に13年以降この温泉観測中に数回の大小様々な地震に出会い、温泉温度の上昇など顕著な動きを観測出来た事もあり、今後の観測、研究の大きなお土産をいただきました。

遠隔地勤務ということ

平成14年(2002)からは4代目の所長が渡辺邦彦先生となり、忙しい中を鳥取に足を何度と運んでいただきました。渡辺先生と竹内文朗先生共に、若き頃、北陸観測所勤務の経験をされていたので、遠隔地勤務という共通の話に華をさかせた事もあり、感無量でした。おかげさ言いますが、40年前と時代は随分変わりましたが、人の心はそう簡単には変えられないし、観測を維持して行くためには時代と共にそれぞれがどこでつながらなければいけないなど、観測所施設のつながりの宿命などを話させていただいたこともあり随分と勉強になったつもりですが、まだまだ勉強不足で宿題もいささか残っております。

センター長の梅田康弘先生と伊藤潔先生にはここ数年いろんな力をいただき観測所勤務の支えと元気をつけてもらい、会えばいつでも暖かく声をかけていただいたことに感謝いたします。40年分をまとめるにあたって時間をいただきながら、忘れていたり、大事な事が何であるか示しもつかず、くだらん話の記載ばかりで退職にあたっての文面になった事をこの場を借りましてお詫びします。

締めくくり

最後になりましたが私の気持ちを述べさせていただきます、締めくくりとさせていただきます。

昭和39年(1964)の春から始まり、この時を迎えることになりました。全ての観測所生活の中で大変にお世話になりましたことに感謝の気持ちでいっぱいです。何もたいした事もせず、ついつい元来の、のんびり屋と、頑固で、融通の効かない堅物の回転の悪い私でしたが、皆さんと一緒に

に仲良くより良い仕事をさせていただき事を念願しつつ来ました。長いようでしたが、なんとまあ、あつと言う間の40年でした。

皆様には公私共にいろいろとアドバイスや激励をいただき、力もいただきました。多くの先生方、先輩、同僚、後輩の方々そして非常勤職員の舟橋多津様、長尾孝子様、中尾愛子様、小田由香様、観測所関係地元地主の方等々、知らず知らずの間に整理のつかぬ程の方々とお付き合いがあり、多くの教えをいただき勉強をさせていただきました。いろんな力をいただきながらも、思うように活用できなかった私のふがないところが多々あり、ことごとく皆様には大変に迷惑をかけたことをお許し願うと共に、よくぞここまでお付き合いしていただいたことに嬉しさを覚えます。

勤務生活を振り返りますれば、日常の保守点検業務にも日々新しい発見があり、同時に、多くの人々との出会いや親交を深めさせていただき機会に恵まれて、このようなこと全ての結果として、ただただ知らず知らずのうちに観測所が好きになったとしか言えませんが、良き皆様とのとても素晴らしい関係を持たせていただいた事に感謝の気持ちでいっぱいです。41年分の私の大切な記憶の一部を思いつくままに書きましたが、この辺でペンを置く事にいたします。

最後になりましたが、今後の防災研究所のますますの発展と、皆様の御健康、御活躍をお祈りしまして、私の定年退職の挨拶といたします。長い間ほんとうにありがとうございました。

さようなら。

平成17年3月31日